

— 連載 —

美術館のある風景 (第20回)

今美術館に必要なこと 〈その四〉

三菱一号館美術館 館長 高橋 明也



レンブラント作《ダナエ》1636年、
エルミタージュ美術館所蔵
1985年に硫酸を浴び、奇跡的に修復
された作品

この3月中、パリ、アムステルダム、デュッセルドルフ、ブダペストを廻ってきました。あのジャーマン・ウイングスのクラッシュ事故の時には丁度、デュッセルドルフから同じ航空会社のフライトで移動する直前で、肝を冷やしました。他方、3月18日には、チュニジアの国立バルド博物館で外国人観光客を標的にしたテロが起き、日本人3人を含む20人以上が犠牲になりました。私も遙か昔の学生時代に訪れましたが、チュニジアは古代文明とイスラム文化、そしてフランスやイタリアの近代文化が渾然と入り混じった本当に美しい国です。バルド博物館もフェニキアやローマなどのモザイクの比類の無いコレクションをもつ、素晴らしい博物館です。そんな場所でこれほどの流血の惨事が起こるとは誰が想像したのでしょうか。

でも、考えてみれば、収蔵庫などのバックヤードは別にして、通常の運営状態での美術館や博物館は全く無防備です。欧米の美術館の多くは、エックス線や視認による入館者の持ち物検査を行っています。テロリストたちがその気になればこうした警戒措置は簡単に突破されてしまうでしょう。「美」や「知」、「感動」や「共感」といった、いわば人々の善意を前提にした施設であるミュージアムは、「憎悪」や「破壊衝動」といったものには殆ど対処できません。実際、今までも作品は様々な形で傷つけられています。かつてエルミタ

ージュ美術館所蔵のレンブラントの名作《ダナエ》が硫酸をかけられ、東京の国立近代美術館でも梅原龍三郎の作品多数が破壊されたのはそうした例です。いくら監守の人がいても、悪意をもって行為を貫徹しようとする人を止めることはまず不可能なのです（バルド博物館では、そうした最低限の監守による阻止機能さえも不全だったことが問題だったようですが）。

今年に入って、胸の悪くなるようなニュースが何度か配信されています。それはIS（イスラム国）による古代遺跡や博物館の破壊です。これまでも歴史の諸相で「イコノクラスム（偶像破壊）」や焚書坑儒は行われてきましたが、その殆どは同時代の標的に対する政治的・宗教的行為でした。今回のように、自らのルーツでもあるメソポタミアの古代文明まで徹底的に破壊しようとする「狂信」は、さらに増幅された悪意と無知、歪んだ自意識を感じさせます。でも見方を変えれば、それは彼らの自信の無さの現れで、造形作品が持つ力をISが無意識のうちに理解し、畏れていることに他なりません。それ故、美術館は断固として優れた展覧会や美しい展示をすることで、こうした脅威に立ち向かうことが必要です。とはいえ、西欧の植民地主義の負の歴史や、世界に広がる格差の問題とも根深く結びついたこの悲しむべき事態は、一体いつ収拾されるのでしょうか？